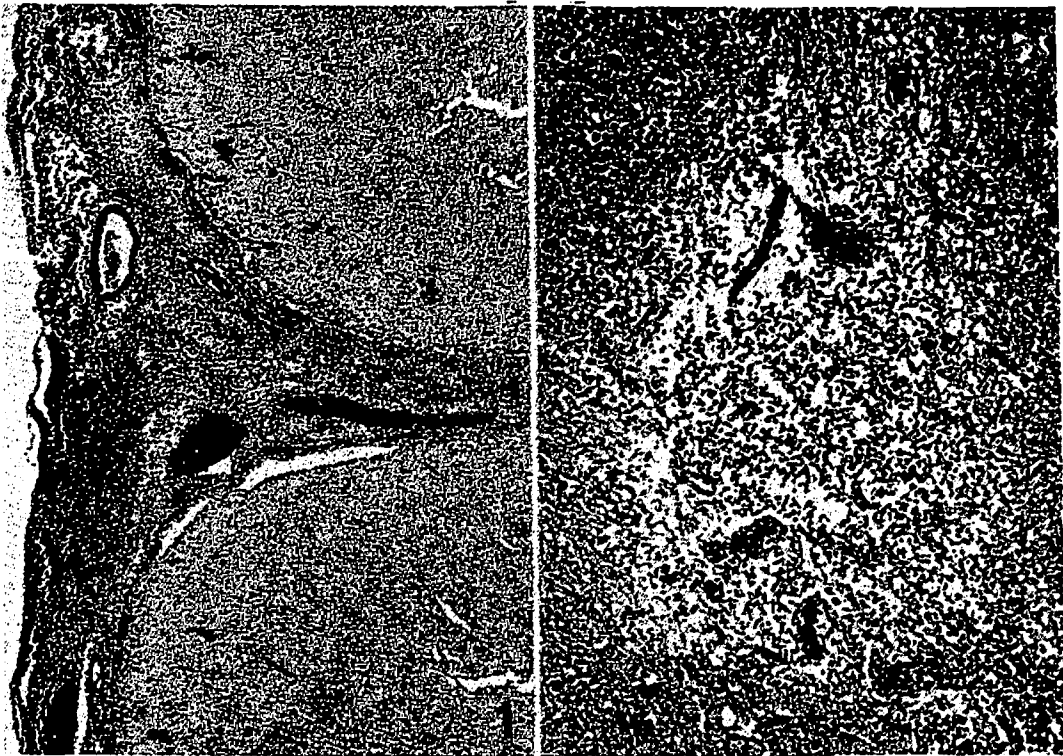


Pasteurella 様菌による牛の中樞神経病変

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題 第15回獣医病理学研修会提出標本 No.229



提出例は、鳥取県下の某保育センターで飼育されていた約1ヵ月令のホルスタイン雄牛で、1972年6月に斃死した。このセンターでは、約100頭の子牛が保育されていたが、同年春以来、呼吸器症状を示して斃死する症例が相次ぎ、ことに6月には15頭も斃死した。当教室において、それらのうちの4例が病理学的に検索された。その結果、いずれの例にも線維索性肺炎が共通していたが、本例のみには、中枢神経にも病変が認められた。

肉眼所見：脳では、軟膜の充血、大脳溝深部における散発性小出血、全領域の脳室の拡張があり、第四脳室には少許の舌苔様物が認められた。また、大脳白質背方より、前頭葉から後頭葉にかけて、おむね連続して縦走する数個の白色軟化巣が観察された。これらは、口径が米粒大ないし約1cmで、しばしば裂隙状を呈していた。内臓では、線維索性肺炎が、両側の尖葉、心葉に主座していた。そのほか、全身リンパ節の軽度の腫大、血漿蛋白の軽度の増量があった。なお、肺、肝、脾、リンパ節から、Pasteurella様菌が分離された。

組織所見：第一に、高度の線維索性化膿性軟膜炎が、脳、脊髄の全領域に認められた。この病変は、好中球ならびに単核細胞を主とする細胞成分と、線維素を主とする

る液性成分の滲出から成り、充血、出血も伴われていた(図1；大脳側頭葉、H-E染色、×33)。軟膜炎に接する脳表層の実質では、基質の疎性化、血管周囲性の出血ならびに軟膜炎と同性質の滲出物の滲出があった。

第二に、線維索性化膿性滲出物は、脳実質のウイルヒョウ・ロバン腔に、また、脳室内にも、多発性に認められた。前者では、周囲基質の疎性化、脂肪顆粒細胞の出現、グラム陰性で極染色を示す桿菌叢が、しばしば認められた。脊髄では、中心管に接続した大型の化膿巣が、実質に認められた。

第三に、大脳白質に、比較的大型の軟化巣が散在していた(図2；前頭葉、H-E染色、×67)。これらは、限界明瞭で、空洞化するものもあったが、病巣内には、充血した血管、小膠細胞ならびに脂肪顆粒細胞の繁殖、さらには、好中球、単核細胞も混在し、活動型崩壊像を示していた。軟化巣の辺縁部では、基質の疎性化、髄鞘の脱落、軸索の球状膨化、まれには、液化が認められた。

診断：Pasteurella様菌による大脳白質軟化を伴った化膿性髄膜炎・脳脊髄炎。本例の内臓には、前記の肺炎のほかに、全身性感染を示唆する組織病変があった。従って、その中枢神経病変は、敗血症の一分症と見なされる。